［症例・事例・調査報告］

近畿地方における福祉科高等学校生徒の福祉意識に関する調査報告

田中　秀和[1)]，立花　直樹[2)]

キーワード：福祉科高等学校，福祉教育，進路，社会福祉

A Study on the Attitudes for the Welfare of the Student in Welfare Course Senior High School on Kinki district

Hidekazu Tanaka[1)]，　Naoki Tachibana[2)]

Abstract

In this paper, we clarify “consciousness for the welfare of the student in welfare course Senior High School on Kinki district”, and Furthermore, I assume that I examine and consider “an ideal method of welfare course Senior High School” a study purpose. As a result of having investigated it to 346 students in welfare course Senior High School, two points to raise below became clear.

①About a curriculum of welfare course Senior High School, 44.5% students answered “wanted to study more deeply” and 54.3% student answered “were good by a curriculum with the present” on.

②The 30% student answer “does not want to get a welfare job in the future” and feel a difference with an ideal from “welfare learning” or “the training experience in the welfare institution” practically and hope for work except the welfare.

③The 75.7% of students recognize the importance that many high school students learn about “the welfare”.

Keywords : welfare course Senior High School, Welfare education, A future course, social welfare

要旨

本稿の研究では、福祉科高等学校の生徒の福祉に対する意識や福祉教育の現状を明らかにし、福祉科高等学校のあり方について検討・考察することを目的とした。福祉科高等学校の生徒346名に調査を行った結果、以下に挙げる３点が明らかとなった。

①　高校福祉科のカリキュラムについて、44.5%の生徒が「もっと深く学びたい」と答え、54.3%の生徒が「現在のままのカリキュラムでよい」と答えた。

②　30%の生徒が「将来的に福祉職に就きたくない」と

１）学校法人　国際総合学園　国際こども・福祉カレッジ　２）関西福祉科学大学　社会福祉学部

［連絡先］田中　秀和、立花　直樹
〒951-8164　新潟県新潟市中央区関屋昭和町2-84-201
TEL：025-378-5176
E-mail：tanaka.hidekazu@nsg.gr.jp

答え、「福祉学習」や「福祉施設での実習経験」等から理想と現実に違いを感じ、福祉以外での仕事を望んでいた。

③　75.7%の生徒が、「福祉」について学ぶ重要性を認識している。

Ⅰ　はじめに

近年の急速な高齢化の進展は、福祉人材に対する需要を増大させている。質の高い福祉専門職養成が今日切実に求められている。そのような中、福祉科高等学校では、卒業時に訪問介護員資格や介護福祉士の受験資格を付与されるケースが多い。つまり、福祉科高等学校の卒業生には、介護人材の担い手としての役割が期待されている。

文部科学省の定める学習指導要領では、「主体的に問題を解決する能力、創造的な能力と実践的態度」が課題とされている。では、実際に福祉科の生徒が上記の課題を学んでいるのかと筆者らは疑問に感じた。また、「何故、福祉科高等学校を選択し、どのように福祉を捉えているのか」ということに着目した。

Ⅱ　調査内容

1　調査方法

1）調査対象

協力の得られた近畿地方の「福祉科・福祉コースが設置されている高等学校の福祉科」で、調査の承諾を得られた10校に在学している２～３年生346人を対象に、自記式調査票を用いて留置調査を行った。調査は日本社会福祉学会の倫理指針に基づき行った。この調査は地域によって福祉意識が異なる可能性を考慮し、今回は近畿地方の高校を選定した。

2）調査期間

2010（平成22）年10月20日～11月15日

3）調査項目

①高校福祉科について

高校福祉科に対して、満足しているか、どのように感じているかを把握するために、以下の設問を行った。設問１.「福祉科の高等学校を選択してよかったと思うか」設問２.「あなたが通われている高校のような、福祉を教える学校が増えたほうがよいと思うか」という質問を設けた。

②学習内容について

高校福祉科の学習内容に対して、満足しているか、どのように感じているかを把握するために、以下の設問を行った。設問１.「高校生の段階では、現在の学習内容で十分と思うか」設問２.「現在のように福祉を学びはじめるのは、高等学校からでよいと思うか」「福祉は、福祉に関心がある生徒だけが学べばいいと思うか」という質問を設けた。

③将来の進路について

福祉を学んだ結果、実際に就職に活かそうと考えているのか、福祉職に対する関心を把握するために「将来福祉職に就きたいと思うか」、「卒業後すぐに福祉職に就きたいと思うか」という質問を設けた。

2　調査結果

調査の結果、福祉科のある高等学校２～３年生（計10校）の協力を得ることができた。回答者の内、男子生徒は98名（28.3%）で、女子生徒は228名（71.7%）で、合計346名から回答を得た。回答者の内、高校２年生が153名（44.2%）で、高校３年生が173名（55.8%）であった（**表３**）。

表３　回答者の一覧

	高校２年生	高校３年生	合　計
男子生徒	45名(45.9%)	53名(54.1%)	98名(100%)
女子生徒	108名(47.4%)	120名(52.6%)	228名(100%)
合計	153名(44.2%)	173名(55.8%)	346名(100%)

1）高校福祉科について

「高校福祉科を選んでよかったか」という設問では、「はい」と回答したのは312名（90.2%）、「いいえ」は12名（3.5%）、「その他」は22名（6.3%）であった（**図１**）。

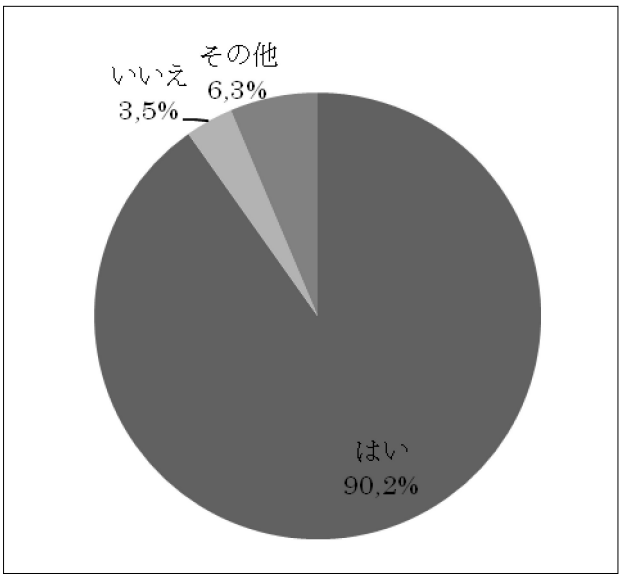

図１　高校福祉科を選んでよかったか

「福祉を教える高校を増やすべきか」という設問では、「増やしたほうがいい」と回答したのは272名（78.6%）、

「このままでいい」は70名（20.2%）、「減らしたほうがいい」は２名（0.6%）、無回答２名（0.6%）であった（**図２**）。

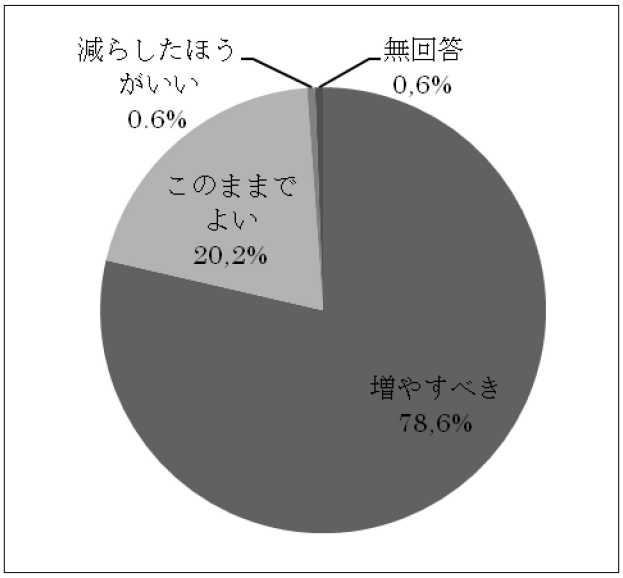

図２　福祉を教える高校を増やすべきか

２）学習内容について

「福祉は、関心のある生徒だけが学べばよいか」という設問で、「はい」と回答したのは64名（18.5%）、「いいえ」262名（75.7%）、「その他」18名（5.2%）、無回答２名（0.6%）であった（**図３**）。

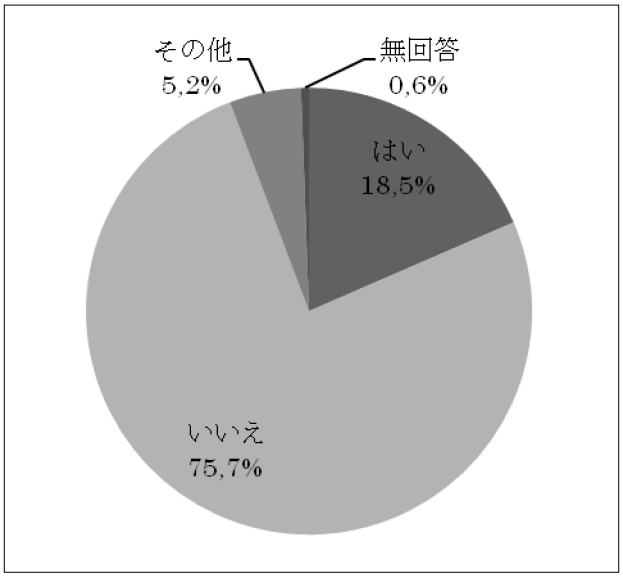

図３　福祉は関心のある生徒だけが学べばよいか

「現在通っている高等学校福祉科の学習内容は十分か」という設問では、「もっと深く学びたい」と回答したのは154名（44.5%）、「現在のままでよい」は188名（54.3%）、「もっと浅くてもよい」は２名（0.6%）、無回答２名（0.6%）であった（**図４**）。（**表４**）。

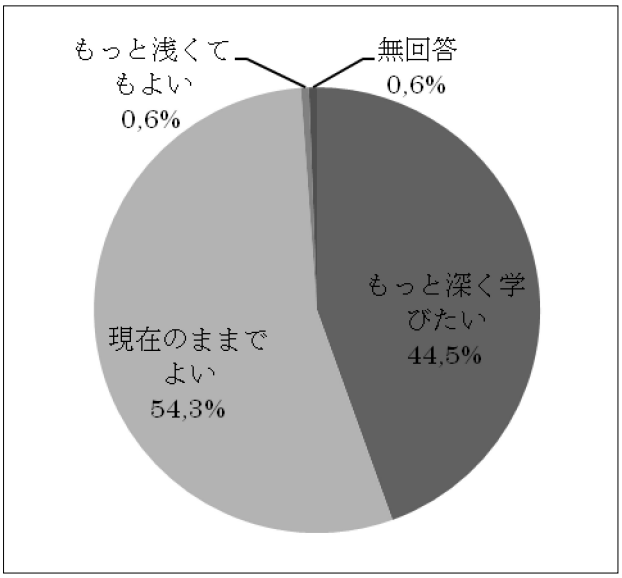

図４　現在通っている高校福祉科の学習内容は十分か

表４　高校福祉科の学習内容について

		学習内容は十分か				
		もっと深く	そのまま	もっと浅く	無回答	総計
高校福祉科を選んでよかった	はい	152名（48.7%）	158名（50.6%）	0名（0%）	2名（0.6%）	312名（100.0%）
	いいえ	0名（0%）	10名（83.3%）	2名（16.7%）	0名（0%）	12名（100.0%）
	その他	2名（9.1%）	20名（90.9%）	0名（0%）	0名（0%）	22名（100.0%）
	総計	154名（44.5%）	188名（54.3%）	2名（0.6%）	2名（0.6%）	346名（100.0%）

次に「高校福祉科を選んで良かったか」という設問と「高校福祉科の学習内容は十分か」という設問のクロス集計を行った。「選んで良かった」と回答した生徒は「もっと深く学びたい」152名（48.7%）、「そのままでよい」158名（50.6%）が多かった。反対に「選んで良かったと思わない」と回答した生徒は、「そのままでよい」10名（83.3%）、「もっと浅くて良い」２名（16.7%）であった（**表４**）。

「福祉を学びはじめるのは高校からでよいか」と設問では、「はい」と回答したのは270名（78.0%）、「いいえ」56名（16.2%）、「その他」18名（5.2%）、無回答２名（0.6%）であった（**図５**）。

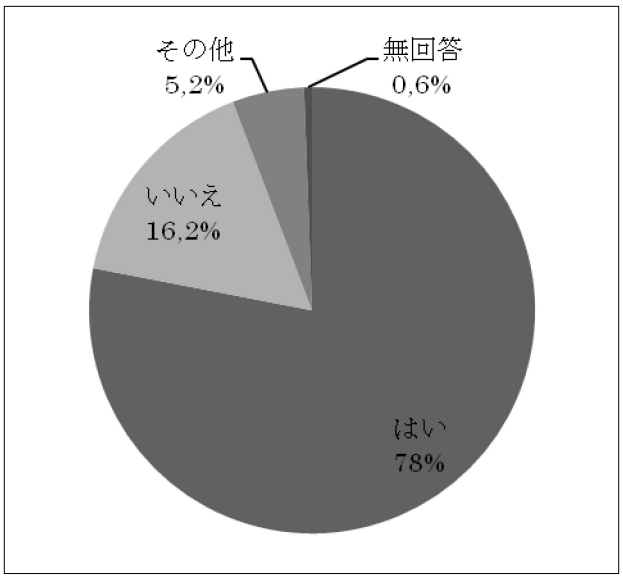

図５ 福祉を学び始めるのは高校からでよいか

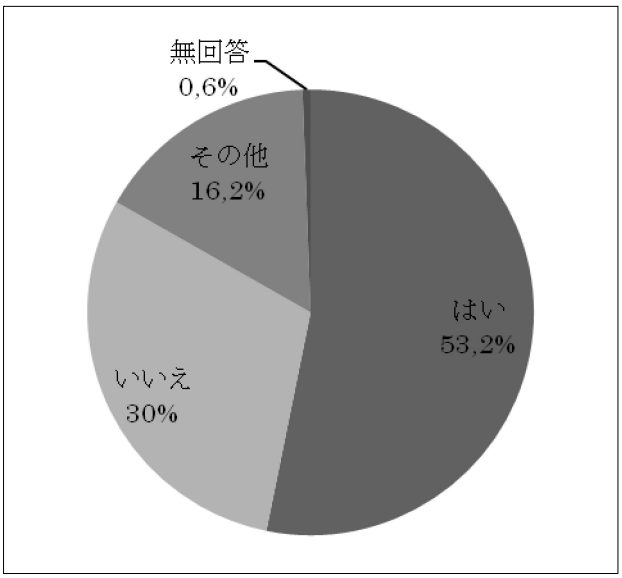

図７　将来的に福祉職に就きたいか

３）将来の進路について

「卒業後すぐに福祉職に就きたいか」という設問では、「はい」と回答したのは70名（20.2%）、「いいえ」250名（72.3%）、「その他」24名（6.9%）、無回答２名（0.6%）であった（**図６**）。

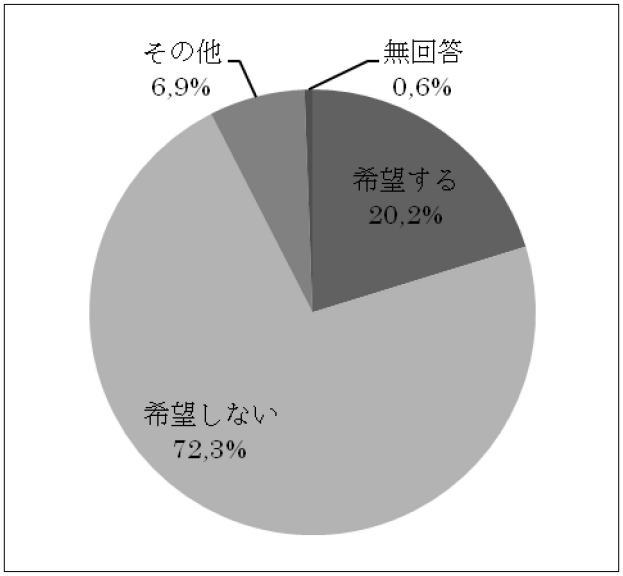

図６　卒業後すぐに福祉職に就きたいか

「将来的に福祉職に就きたいか」という設問では、「はい」と回答したのは184名（53.2%）、「いいえ」104名（30.0%）、「その他」56名（16.2%）、無回答２名（0.6%）であった（**図７**）。

次に「卒業後すぐに福祉職に就きたいか」という設問と「将来福祉職に就きたいか」という設問のクロス集計を行った。「福祉職に卒業後すぐに就きたい」と回答したのは68名（19.7%）、「将来福祉職に就きたいが卒業後すぐには就かない」は106名（30.6%）、「福祉職に就かない」と答えた生徒は102名（29.5%）、「その他」は70名（20.2%）であった（**表５**）（**図８**）。

表５　将来の進路と福祉職に対する思いについて

		卒業後すぐに福祉職に就きたいか				
		就きたい	就かない	その他	無回答	総計
将来福祉職に	就きたい	68名（37.0%）	106名（57.6%）	10名（5.4%）	0名（0%）	184名（100.0%）
	就かない	0名（0%）	102名（98.1%）	2名（1.9%）	0名（0%）	104名（100.0%）
	その他	2名（3.6%）	42名（75.0%）	12名（21.4%）	0名（0%）	56名（100.0%）
	無回答	0名（0%）	0名（0%）	0名（0%）	2名（100.0%）	2名（100.0%）
	総計	70名（20.2%）	250名（72.3%）	24名（6.9%）	2名（0.6%）	346名（100.0%）

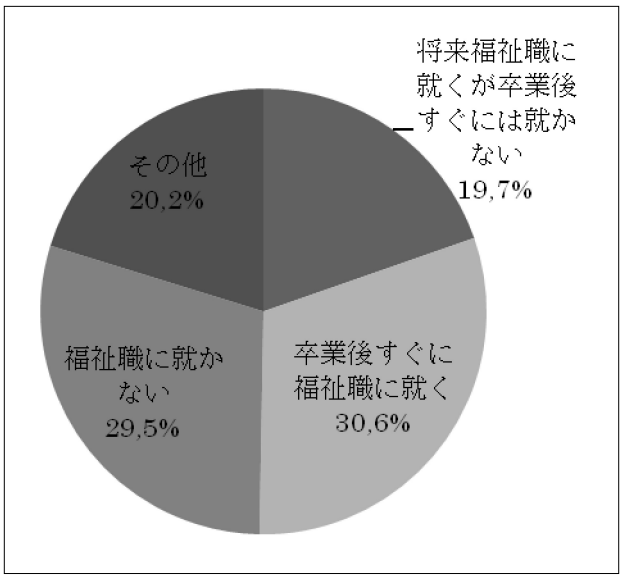

図８　卒業後または将来的に福祉職に就きたいか

Ⅲ　考察

１　高校福祉科のあり方、学習内容について

「福祉科の高校を選んでよかったか」の問に対しては、90.2%の生徒が「はい」と回答しており、多くの生徒が高校福祉科の選択に満足していると思われる。

これに関連し、田中は先行研究の中で、高校福祉科入学生の福祉に関する意識や関心は総じて高いことを明らかにしている[1)]。また、教育社会学者の本田由紀は現代社会を、特に若者が『自分が社会の中で何者でありえるのか』に対する基準や答えを出せなくなっている現状を指摘している[2)]。今回の調査の中では、高校福祉科入学生はそれぞれに高い入学動機をもち、高校の普通科志向が強い中であえて福祉科を選び、競争原理や効率主義とは異なった世界で自分が活躍していくイメージを抱いているのではないかと考えられる。

「福祉を学びはじめるのは高校からでよいか」では、78.0%の生徒が「はい」と回答しており福祉教育を高校生の段階から学んでいることに満足していると筆者らは考える。

「福祉は、関心のある生徒だけが学べばよいか」では、75.7%の生徒は「いいえ」と回答しており、もっと一般教養として福祉教育が浸透することを望んでいると思われる。

「現在通っている学校の学習内容は十分か」では、調査の結果ほぼ全員が「もっと深く学びたい」、「このままでよい」の２つの意見に分かれた。「もっと深く学びたい」と望む生徒は福祉教育に強い関心があり、「このままでよい」と回答した生徒は、現在の学習内容に満足していると思われる。

田中は、高校福祉科卒業生の在学中の傾向について、多くの生徒が授業に満足しており、高い入学動機をかなえる形で学習実践が行われていたことを報告している[4)]。また、一方では「進路状況をみると上級学校へ進学する生徒も半数おり、普通教科の学習への評価がおしなべて低いことや『普通科目が少ない』といった声から、普通教科と専門教科のバランスのとり方が課題となっているのも事実である」と述べており[3)]、この点は今後議論が深められるべきであろう。さらに田中は別稿の中で、記録に関する教育の必要性がより高まってきていることを述べている[4)]。この点は、今後より強化されていくべき課題であろう。

「福祉を教える学校を増やすべきか」では、「増やしたほうがいい」と回答したのは136名（78.6%）となっており、福祉の知識や技術の必要性が生徒に対して広がってきたためと思われる。

２　将来の進路について

「卒業後すぐに福祉職に就きたいか」では、「その他」と回答した生徒は6.9%で、理由として保育士や看護師等を視野に入れていると回答した生徒が複数いた。福祉を学んでいった中で医療・看護・保育等に関心を持ったと思われる。

「将来的に福祉職に就きたいか」では、30.0%の生徒が「いいえ」と回答しており、福祉学習や福祉施設等へ訪問・実習で理想と現実の違いを感じ、将来の職業として福祉職に関心が持てない、他の職業に関心を持った等が考えられる。

「将来的に福祉職に就きたいか」と「卒業後すぐに福祉職に就きたいか」からクロス集計を行った結果、30.6%の生徒が「将来的に福祉職に就きたいが今すぐには就かない」と回答した。高校卒業後も更に福祉を学び、その後就職したいと考えていると思われる。

「１）高校福祉科について」「２）学習内容について」「３）将来の進路について」考察してきたが、全体的には高校での専門的福祉教育に満足しており、福祉学習に対して積極性が感じられた。また、一般教養として福祉の知識や情報が浸透することを望んでいると思われる。進路に関しては、卒業後福祉職に就く生徒、大学や専門学校で更に福祉を学ぶ生徒、福祉を学んでいく中で看護や医療により関心を持った生徒、福祉職以外に就職する生徒等がいることがわかった。

これに関連して、本田は、「教育の職業的意義」についての考察を行っている。本田は、かねてからメディアに蔓延する誤った「ニート」言説等に対して詳細なデータ分析を紹介しながら批判を行ってきた論者である。同氏は一貫して「生きる力」「キャリア教育」「コミュニケーション能力」「人間力」など抽象的でつかみにくい概念

が社会に浸透したことに反論をしている。その上で、より具体的な「柔軟な専門性」を若者が身につけられるように、専門高校の増設等の提案を行っている。また、それと同時に不当な扱いを受けやすい現在の労働社会においては、労働法等の知識を身につける機会を学校教育の中で創設し、若者が＜抵抗＞する力を植え付ける必要性も述べている[5)]。

今回の調査では、30.6%の生徒が「将来的に福祉職に就きたいが今すぐには就かない」と回答した。これは、急速な高齢化による要介護高齢者増加に対応する介護人材の担い手としての高校福祉科の存在意義を根本から覆す結果であり、高等学校の福祉科等で「福祉関連教科」を学び「福祉実習」を行ったことがマイナスになっている可能性があることを示唆するものである。また、小学生･中学生の将来希望する職業において、「福祉」が選択されていないのは、近年の日本において小学校・中学校で実施されてきた「福祉教育」や「福祉交流」が功を奏していないともいえる。

しかし、本田が主張する「柔軟な専門性」を身に付けた若者は、たとえ福祉職に就くことがなくとも、自らが学んだ価値・知識・技術を社会で生活していく中で発揮することができるのである。そのような意味においても高校福祉科は、存在意義の大きいものである。また、保正は高校福祉科卒業生のライフイベントを分析する中で、「全体を通してみると、卒業生たちのコメントからは、福祉分野に限らず他分野や家庭において高校時代に学んだことを活かしていこうとする姿勢が伝わってくる」と報告している[6)]。つまり、「福祉科」「福祉教育」「福祉交流」イコール「介護人材」と短絡的に結び付ける社会の方に問題があり、「福祉の知識や技術」「福祉マインド」等を持った若者が多く育つことによって、将来の国民の意識が変化することこそ、高等学校福祉科や小学校・中学校・高校で実施される「福祉教育」「福祉交流」の存在意義ともいえる。

Ⅳ　結論

生徒は、現段階の福祉に対する知識・技術・社会的地位に不安を感じているものの、問題を解決しようという意識は強いと思われる。生徒の福祉に対する問題解決能力の向上のために、これまで以上に施設訪問を行い、実際に福祉現場で活躍している援助者による講義や経験談等の実践的な学習内容と、様々な経験ができる場の提供の必要性がある。また、生徒は地域住民への福祉を学ぶ機会の増加や地域福祉の発展・増進を重要視し、地域の関係・ふれあいを大切にする必要性も感じているのではないだろうか。

具体的には地域交流ではボランティア活動・地域行事への参加・福祉情報の提供等、学校の活動では高校全般に行事・奉仕活動を積極に行う福祉科目の一般高校への導入等が考えられる。併せて福祉を身近に感じられる環境づくりが必要ではないかと考えられる。

文献

1）田中泰惠：高校福祉科卒業生の在学中の傾向，田村真広・保正友子編：高校福祉科卒業生のライフコース―持続する福祉マインドとキャリア発達．ミネルヴァ書房．京都．pp43－69，2008.

2）本田由紀：若者と仕事―学校経由の就職を超えて．東京大学出版会．東京．p201，2005.

3）田中泰惠：高校福祉科卒業生の在学中の傾向，田村真広・保正友子編：高校福祉科卒業生のライフコース―持続する福祉マインドとキャリア発達．ミネルヴァ書房．東京．p55，2008.

4）田中泰惠：現場実習における困難と実習からの学び日本福祉教育ボランティア学習学会年報13：p30，2008.

5）本田由紀：教育の職業的意義―若者、学校、社会をつなぐ．ちくま新書．東京．2009.

6）保正友子：高校福祉科卒業生のライフイベント，田村真広・保正友子編：高校福祉科卒業生のライフコース―持続する福祉マインドとキャリア発達．ミネルヴァ書房．京都．p129，2008.